

並存

その生を救う道は、ただひとつだった
しかも
それを選ぶことは不可能に思われた

もし歩き続けなければならないのなら
俯きながら歩くだろう
それほどに生は重かったけれど

酒を片手の実りない夜々に
聞こえなくなった耳と
見えなくなった眼を更に麻痺させる

ああ、これこそが自虐というものだ
この下らなさに満足していながらポーズのみを装う
これこそが自虐というものだ

逃亡者の生活を、僕は棄てたのか
それとも、今この時こそが
逃亡者の生活なのか

次元を超えることなど出来はしない
次元を超えた比較など出来はしない
故に並存は不可避である

物理や数学には^{カオス}混沌はない

それと同様に
今の僕にも混沌はないのだ

それは、つまり
次元が段階ではないからなのだ
僕が統一を求めているという証なのだ

それにすぎないのだ
つまり
それこそが僕の生を救う道なのだ

則ちそれは逃亡ではないか、と君は言うだろう
しかし、可能性を閉ざすことが逃亡なのか
全てを歩むことを君は僕に求めるのか

君の言う通りだ、たとえ
それが僕の生を救うただひとつの道だとしても
それを選ぶことなど不可能なのだ

平行線が交わることができないのは
ある定められた公理のもとでのみであり、則ち
ある前提に基づいた空間の中でのことにすぎない

鏡の中の鏡像の如く
僕自身が並存しているとしたならば
僕の生を救うことはできないのだ

なぜなら
それを選んだが最後
無限大に連なる僕は死し
唯一、この空間
則ち人々が‘世界’と呼ぶところに存在する僕だけが
閉ざされた空間の中
狭苦しく喘ぐ僕だけが生きることとなるからなのだ

(1991.6.1)